

## 東日本大震災を忘れない——『東北の新月』を通して

リンダ・オーハマ

(執筆||矢頭典枝)

■講演者……リンダ・オーハマ(日系カナダ人映画監督)

■コメンテーター……水野孝昭(本学アジア言語学科教授)

■司会・通訳……矢頭典枝

■使用言語……日本語、英語(適宜、通訳あり)

### Linda Ohama氏の紹介(矢頭典枝先生)

カナダの映像作家・ドキュメンタリー映画監督として知られるオーハマ監督は、カナダの西部アルバータ州で生まれた日系カナダ人三世です。カルガリー大学で芸術学と教育学を専攻して学位を取得し、ケベック州とオンタリオ州で教鞭をとっていましたが、その後、映像の世界に足を踏み入れました。現在、カナダ・ブリティッシュコロンビア州芸術評議委員を務め、バンクーバーを拠点に今日お見せする『東北の新月』の編集をしています。

日系カナダ人の一世と二世は、第二次世界大戦中に強制収容所に収監されましたが、オーハマ監督のご両親と祖母もその中にいました。オーハマ監督が発表してきたこれまで八本のドキュメンタリー映画のうち、五本がこうした日系カナダ人の歴史と苦悩を題材にした作品です。一九九二年に完成した『The Last Harvest(『最後の収穫』)』では、オーハマ監督自身の家族の歴史を描き、高い評価を得ました。この作品は一九九三年のカナダとアメリカの映画祭で多くの賞を受賞し、日本のNHKでも放送されました。また、『Obachan's Garden(『おばあちゃんのガーデン』)』は二〇〇二年のカナダ映画賞 Leo Awards の最優秀監督賞、最優秀脚本賞などを受賞しました。

オーハマ監督の作品には二つの特徴があると思います。一つはフェミニズムの視点です。オーハマ監督の作品には、自らの意思で自分の人生を切り開く「強い女性」が登場します。さきほど紹介しました『おばあちゃんのガーデン』にでてく



るオーハマ監督の祖母も、女性に不利な不本意な理由でカナダに渡った後、自らの意思で定められた運命を拒絶し、新たな人生をカナダの地でたくましく切り開きました。オーハマ監督自身の生き方を拝見していても、強い女性だと私は感じます。

二つ目は、日系人としてのアイデンティティの模索です。オーハマ監督は、今は日本語を少し話せるようになりましたが、カナダ生まれカナダ育ちなので以前はほとんど日本語が話せませんでした。昔はカナダではアジア系に対する差別があったのですが、白人の中で育ったオーハマ監督は、自身はカナダ人だけでも、自分の外見が他の人と異なり、日系のルーツがあるということを常に意識して生きてきました。それで、日系人に関する作品を作ることによって、自分の日系人としてのアイデンティティを構築しているのです。二〇一一年三月一日の東日本大震災がカナダで報道されたとき、自分と同じ血が流れる人々が住む日本にこんな大変なことが起きている、とひどく胸を痛めました。オーハマ監督は行動の人です。即、バンクーバーでチャリティー・コンサートや募金活動を展開するなど、支援活動に専念し、その年の六月に来日し、東北でテントを張って支援活動を行いました。

## 講演と試写 (Linda Ohama 監督)

こんにちは。

東日本大震災を題材にしたドキュメンタリー『東北の新月』は編集の最終段階にきています。もうすぐ公開する予定です。今日は、その一部を皆様にお見せいたします。

なぜ、私が東北に行ったのか、ということをよく聞かれます。私は映画監督としてではなく、母として、おばあちゃんとして、そして日系カナダ人として東北に行きました。そして、私は日本を愛しています。二〇一一年三月一日、東北の地震と津波の様子がバンクーバーでも大きく報道されました。世界中がそうだったと思いますが、私たちもその光景に呆然とし、心配でなりませんでした。翌日、当時六歳だった孫娘の Ella が私に聞きました。「東北の子供たちは大丈夫なの？」と。私は「大丈夫じゃないと思う。」と答えました。そして、「もし、Ella ちゃんに同じことが起こったら、どうしてほしい？」と尋ねました。すると Ella は「ハグして(抱きしめて)ほしい。ハグしてくれたら少しは怖くなくなる。」と答えました。「でも、東北に行けないからハグしてあげられないね。」と私は言いました。すると Ella は寝室に行って古いシーツを四角く切って、日の丸を描き、その周りにイラストと勵ましのメッセージを書き、「Cloth Letter (布の手紙)」を作りました。その後、Ella の姉や友達も同じことをし、自分たち

のハグを布の手紙にしたのです。私はこれをカナダ中に広め、カナダ全国から四角い布に書かれた勵ましのメッセージが自宅に届きました。それをつなぎ合わせて、大きなハグがまつたキルトにし、六月、日本にそれを持参し、東北の子供たちに見せました。最初に訪問したところは宮城県の閑上中学校です。そこは一四名の在校生が津波で命を落とした学校です。実は、この布の手紙のキルトを見せたらどのような反応があるのか、正直言つて怖かったです。その学校の子供たちはあまりに悲惨な目に遭っているからです。しかし、キルトを袋から出し、それが長いキルトですので、どんどんキルトが続いていくのを見て、子供たちは笑顔を見せ始め、そのうち、大きな拍手が沸き起こったのです。その時、思いました。カナダの子供たちのハグを感じてきているのだと。では、今からバンクーバーでの支援活動の様子をショート・フィルムでお見せします。

(募金活動、チャリティー・コンサート、「布の手紙」作成の様子が映し出される。)

こうして「布の手紙」プロジェクトが始まり、私は東北にやってきたのです。すべては孫の Ella の発案から始まりました。

『東北の新月』は神田外語大学とも深い縁があります。私は東日本大震災が起きる前から、神田外語大学に呼ばれ、講演会をする機会がありました。震災の翌年、矢頭先生のお招きにより、この大学で震災に関するシンポジウムに登壇する機会がありました。そのシンポジウム終了直後、矢頭先生に、当時、先生のゼミ生だった佐々木星瑛来（せいら）さんを紹介されました。佐々木さんは岩手県大槌町の出身で、実家が津波に流され、お母さまも津波に流されながら九死に一生を得ました。その日、佐々木さんは流される前のご実家の写真を私に見せ、涙ながらに家族の体験を語ってくださいました。佐々木さんは大学を辞めて東北に帰って家族の手伝いをすることを考えていましたが、ご両親はそれに反対し、ぜひ大学を続けてほしい、と望んでいる、とのことでした。その時、私は佐々木さんに、近いうちに大槌町を訪れ、ご家族に会いに行くこと約束したのです。それが神田外語大学と『東北の新月』の繋がりで。佐々木さんご一家は、『東北の新月』の最初の方に出ています。今日の講演会には佐々木さんもいらしています。（佐々木さんを紹介）

私は最初から映画を作るつもりで東北に行ったものではありません。東北の人々から映画監督なのだから東北の状況を描いた作品を作ってほしい、と言われました。しかし、ずっと断り続けていました。自分は日本人の心を持ちたいと思っ

いても、所詮、外国人なので、震災を題材にする映画を作る権利がない、と思ったからです。

しかし、原発の放射線被害に遭った福島県南相馬市小高町に行ったとき、その悲惨な光景に愕然としました。そこでは、命あるものは消滅していました。人の声、犬や猫の鳴き声、車の音―そういった生活の音が一切なかったのです。私はただ呆然とし、泣き崩れました。そのときです。自分の映画監督魂が揺り起こされ、この状況を世界に伝えるべくドキュメンタリーを作ろうと思いました。

『東北の新月』を見る前に、この一枚の布の手紙をご覧ください。これは、宮城県の中学校の先生が描いたものです。東北の人々も布の手紙を作り、今度はカナダへのお礼のキルトにしました。この先生は大川小学校に通っていた一二歳の一人娘を津波にさらわれ、亡くしました。この先生は私を大川小学校に案内し、娘さんが使っていた教室などを見せてくれました。ずっと笑顔でいる彼に私は尋ねました。「たった一人の娘さんを亡くしたのに、なぜ、笑顔でこんなに親切にしてくださいるのですか」と。すると彼は「自分は幸せな人間です。娘が高校生になったり、お嫁に行く姿を見ることはもはやできませんが、私は一二年間、娘の父親だったからです」と答えたのです。この言葉に東北の人たちの強さと前向きな姿勢を感じました。なくしたものについて嘆くよりも、持ってい

るものに対して感謝する、という心持ち方に深く感銘を受けました。

今日お見せするバージョンは完成版ではありません。映像の方はほぼ完成しましたが、音響、音楽、日本語ナレーションはまだです。日本語のナレーションは女優の草刈民代さんが担当します。

『東北の新月』の最初の二〇分間の試写。

- ・津波が大槌町に押し寄せる様子が映し出される。
- ・宮城県の民家の住人が自宅の蔵を案内する——「東北の私たちは気持ちを中心に秘める。それは何重もの扉の奥にしっかりと締まっている蔵のようである」。
- ・岩手県大槌町の佐々木賀奈子さんが、津波に流された状況を生々しく語る。「生き残ったからにはしなければならないうことを、子供、孫、日本中、世界中の人たちに伝えたい」。
- ・佐々木賀奈子さんの長女、太田未彩希さんが長男と生後二週間の乳飲み子を抱えて逃げた状況を語る。
- ・東京にいた佐々木和久さん（賀奈子さんの夫）が、日本海側を通って車を走らせ、大槌町の家族の元に向かった状況を語る。

- ・次女の佐々木星瑛来さんが家族を心配する心境を語る。
- ・避難所で食べ物が配給される様子が映し出される。

・町の人口の約一割にあたる一二八一名が犠牲になった大槌町の町長が被災状況について語る。

・宮城県大川町の住民たちが、震災後の町の変貌について語る。

・宮城県石巻市に住む男性が、涙で「ふるさと」を歌う。彼の案内で大川小学校の惨状が映し出される。

……etc.

## エピローグ

本学での講演会の後、二月二日に東京のカナダ大使館でも試写会が行われた。このとき、本作に登場した東北の方々が遠方よりはるばる集まり、日本語のナレーションを担当した女優の草刈民代さんとご主人の周防正行監督も出席した。試写会の終わりには、本作のなかで歌われている「ふるさと」を東北の方々が自然発生的に歌い始め、涙、涙の閉幕となった。

そして、『東北の新月』は二月末に完成し、三月二〇日に仙台市のせんだいメディアテークにおいて一般公開された。四回上映され、すべての回で満席だった。

また、三月一〇日、オーハマ監督は、カナダ首相のジャスティン・トルドー氏からの手紙を受け取った。それには、リンド・オーハマ監督の『東北の新月』が日本で公開されるこ



リンダ・オーハマ監督とコメントーターの水野孝昭先生(本学アジア言語学科)



司会・通訳の水野孝昭先生



「布の手紙」プロジェクトについて語るオーハマ監督

とを祝福し、カナダ政府としてオーハマ監督の活動を全面的に支援する旨が書かれてあった。

### コメント(水野孝昭先生)

震災一か月後に被災地をめぐって以来、私も福島県の仮設住宅を定期的に訪ねてインタビューをしてきました。自分のささやかな経験からわかるのですが、被災者の皆さんは、いきなりやってきた外来者には「外向けの顔」を見せるだけで、本音はなかなか口に出さないことが多いのです。それが言葉が十分に通じない外国人だったら、なおさらでしょう。

しかし、オーハマ監督は震災直後にカナダから駆けつけて、まず一人のボランティアとして現地に住み込んで被災者への支援を続けました。被災者に文字通り寄り添って寝起きして、長い時間を一緒に過ごして深い信頼関係を築いたうえで、はじめてカメラを握った。最初から「被災ぶりを撮ってやろう」とカメラを担いで現地に飛び込んで、その場で撮った映画ではありません。

だから、被災地の人々の普段着の表情や、本音での語り方が克明に記録されている。津波でわが子を失った悲しみをこらえようとする宮城の父親。見えない放射能の影におびえる福

島の母親。筆舌に尽くし難い破壊の現場と、そこで失われた無数の命。生き残った人々も「なぜ自分が生き延びて、家族が死んだのか」と罪悪感を抱えながら過ごしている。その表情を映像で迫っています。日本のメディアにはない視点で、この五年間にわたる被災者の方の心のひだ、その深さを「追体験」させてもらった気がしました。

中でも、津波で一家がバラバラになった大槌町の佐々木一家の証言は、生々しい。警報が鳴って鍼灸所に来ていた人たちを「安全に避難させなくては」と対応しているうちに、自分が押し寄せた津波に流されてしまったお母さん。濁流にのまれて周囲を見ると、プロパンガスのボンベがボンボンと爆発している。流されていくときに、橋の上から自分を呼ぶ人の声が聞こえて必死で腕を伸ばしたら、奇跡的に救われた。

一方で、お父さんは震災当時、トラックの運転で首都圏にいて帰宅しようとするが、高速道路はみな封鎖されていて、大回りして日本海沿いのルートを上上して、変わり果てた我が家にたどり着く。

出産直後だったお姉さんは、赤ちゃんを抱えて一目散で避難する。一刻を争う津波の危機には、一人一人が一目散で避難することを優先しなければいけない。家族が集まるのを待っている命を落としてしまう。「津波でんでんこ」という、三陸地方に伝わる大津波の被害の教訓を生かしたわけ

す。

そして、家族と連絡が取れなくなったまま一人首都圏で孤立していた当時学生だった佐々木さん。独りぼっちで焦りと不安にさいなまれる中、矢頭先生のゼミを通じてオーハマ監督と出会って、現地での案内役になるのですね。

この一家がそれぞれ無事を確認しあつて、再び家族として一緒になって再生していく。学生だった佐々木さんも、いったんは退学するしかないし決意しながら、矢頭先生や学長以下本学スタッフの支援で、改めて勉学を続ける気持ちを取り戻して、カナダへの短期留学を経て、被災地支援の体験を卒業研究としてまとめいく

わけです。

内輪ボメになつてしましますが、「これぞ本物の教育だ」と思いました。

人々が再び生活を築いていこうとする姿を描いた「再生の物語」でもあるので、見終わって救われた感じがしました。



福島県南相馬市の被災状況（オーハマ監督撮影）